

金山峠のキマダラルリツバメ

足立義弘*

キマダラルリツバメ (*Spindasis takanonis* MATUMURA) の金山・蘇武山系での発見は、1977年8月3日、当会会員谷角素彦氏により採集されたものが最初であると思われる。ここでは1979年までの数回にわたる調査に基づき、本地区での生息状況と色彩変異についてその概要を中間報告としてまとめてみた。

生息範囲・環境について

金山・蘇武山系の環境については、谷角・足立(1979)に記されているが、生息地についてもう少し触れておきたい。今までの採集および目撃記録は、標高700m付近より尾根部の870mにわたる約13.5haの範囲でなされている。一帯はカシワの疎林を主として、その周辺にススキ草原が発達しており、尾根部にはササ原の発達した地域もある。

キマダラルリツバメは、ハリブトシリアゲアリなどのシリアゲアリ属のアリに“養育”され、これらのアリとの関係においてもよく知られている。さらにこのアリの営巣する樹木の近辺に執着したガで成虫は生活するという(具体的な行動範囲についてはわからない)。アリとの関係において知られている樹種は、マツ、サクラ、ワケ、グミなどがある。

これらの観点からも調べたところ、採集地付近には、尾根部に矮小化したいくらかのマツ(今のところここからはアリの巣は見られていない)と、カシワ林と200mほど隔たってかなりのマツ林(アカマツ?)とがある(夏期は足場が悪く未調査のままである)。

行動について

行動については、谷角・木下賢司両氏の観察も含めると次のごとくである。飛行個体は13時過ぎより現れ始め、以後増減をくり返しながら日没まで見られた。朝のうちはカシワ、草などをはたいても飛びだす個体は見られなかった。99%はススキの草原、カシワの樹冠を飛行しており、またそれらの葉上に休止、日光浴をしている個体も見かけた。これら休止している個体の近くに他の個体が来ると追飛を行ない、さらに2~3頭がこれに加わり、らせん状に飛び交うなどの光景があちこちで見られた。またカシワ林に近接しているクリの朽木の

* 現住所 〒616 京都市

枝上で翅の少し汚損した雌が、腹端で枝の表面をトントンとたたくような仕草をくり返しながらかき回っているのを2回目撃した。この行動は産卵に関係していると思われたので、後で木に登って卵の有無を確かめたが確認できなかった(このクリの朽木下部にはケアリの1種が営巣していた)。

行動については以上であるが、これらのことなどからカシワ林を主とした環境と何らかの関係が見いだされるのではないかとの期待をもっている。しかし、マツ林について未調査のままであるなど調査区域が限られており、今後さらに調査を進める必要がある。

雄の翅表面青色部の変異について

金山峠のキマダラルリツバメには、同産地の個体であるにもかかわらず、雄翅表面青色部の発達の違いの強いものと弱いものとの2通りが認められる。以下それぞれを“発達型”、“未発達型”としてまとめる。

発達型

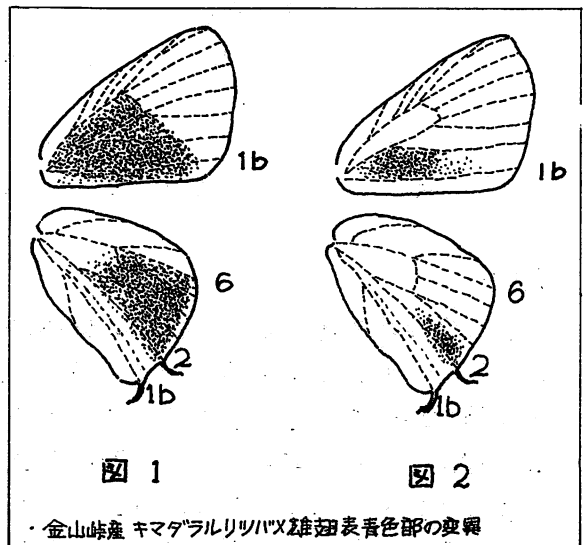
前翅は中室より1b脈を越え後縁まで青色部が発達しており、ちょうど中室横脈上部を頂点とし後縁部を底辺とした二等辺三角形を呈している。後翅では5室より翅基部へは発達せず、2脈をすこし越えたあたりまで青色部が分布している(図1)。

未発達型

前翅青色部は1b室内に納まっており、基部より外へ向けて分布しており、後翅では2室と2脈をすこし越えて下部へはみ出している程度で、2室外側より基部へ向けて分布している(図2)

19個体の標本(木下-10、足立-9)について調べた結果、発達型-8、未発達型-11であった。現在までのところ、各型内部での多少の変異は認められるものの、両者の中間的様相を示す標本は得られていない。なお裏面黒条は太く発達しているようである。^{注1}

この青色部の変異については、「福知山市の記録(キマダラルリツバメの)」として吉井雅弘という人物によって1951年、京都府立福



金山峠産 キマダラルリツバメ雄翅表面青色部の変異

注1 他産地の標本がなく、関係文献、図鑑などの比較によるものである。

知山高等学校の同好会誌『MIKABO』に、青色部の発達しているものを「鳥取型」、未発達のを「京都型」と呼び、福知山に同じように2型が存在した(現在生息しているかどうかは不明)ことを報告されているという。しかし、「現在ではこの形質は変異の幅の大きいものとされ、地域変異を求める指標としてはあまり役立つものではない……」(猪又、1978)とも述べてあり今後の調査が進むなかで両者の中間的な様相を示す個体も現れる可能性がある。

アリとの関係について

この最も肝心なことが説明されていない。とりあえずカシワ林とその周辺で数種のアリを採集したが、その中でキマダラルリツバメと関係がありそうに思われたのは、次の3種であった。なお同定は当会の遠藤知二氏にお願いした。

1. カシワの朽木に営巣していたもの
トビイロケアリ *Lasius niger* LINNE
(ヤマアリ亜科 Formicinae)
2. カシワの樹上にいたもの
トビイロシリアゲアリ *Crematogaster labriosa* SMITH
(フタフシアリ亜科 Myrmicinae)
3. クリの朽木下部に営巣していたもの(文中参照) 注2
ケアリの1種(ハマシケアリ) *Lasius* sp. (*chayashi*?)
(ヤマアリ亜科 Formicinae)

これらのアリとキマダラルリツバメの関係については具体的に究明すべくさらに調査を進めなければならぬ。現在の緊急な課題である。

おわりに

現在金山峠で進んでいる林道工事がこのキマダラルリツバメの生息地域(カシワ林内)のど真中を通る予定であり、標高800m付近にはクイが打ってある。もう既に林の中まで工事は進んでいるかも知れず、キマダラルリツバメとアリとの関係、アリの営巣している樹種などなどほとんどの事柄が明らかにされないままに終わってしまう恐れがある。さらに、キマダラルリツバメ、ハマシドリスジミの数少ない生息地という貴重な自然環境の急変(あるいは破壊が、

注2 本種は、トビイロケアリのグループに含まれるが、ないしはきわめて近縁の種(ハマシケアリ)であるように感じられる。

現実のものとなってしまうとすれば、残念でならない。林道を通すだけならまだしも、周りのカシワ林までも利用価値がないというだけで伐られるとなると、もはやお手上げである。どちらにしてもそう遠くない事のような気がする。

キマダラルリツバメ、ハマシミドリシジミが生息し、その生息環境が、それゆえにたゞ貴重というふうにもみるのではなく、自然の様々な構成物の相互作用によって成り立ち、進化、発展してきた系(あるいは生態系)の中の一員として彼らを見るとき、たゞ偶然にそこに生息していたというような単純なものではないことがわかる。そのうえで彼らの存在の意義といったようなものさえ考えさせられるのである。我々の態度としても、たゞ特定の動植物にこだわるのではなく、あらゆる観点からの総合的なみかたというものが必要になってくるのではないだろうか。現在各地で行なわれている安易な自然の利用や破壊に対して何もできず、もどかしい思いをしているわけであるが、しかし、くじけることなく、先の意味も含め、自然のすばらしさを満喫すると共に、さらに現在の活動を進めたい。自然を相手にするとき、興味の対象は尽きないのだから。



キマダラルリツバメの生息地(中央の人物は筆者)

参考文献

- 谷角素彦・足立義弘. 1979. 金山蘇武山系の蝶類. IRATSUME. 3:8-18
 猪又敏男. 1978. キマダラルリツバメ物語(II). 月刊むし. 89. Aug. 8
 福田晴夫他. 1972. 原色日本昆虫生態図鑑Ⅲチョウ編. 保育社
 川副昭人・若林守男. 1976. 原色日本蝶類図鑑. 保育社